



# 私たちの家族

日本新使徒教会ニュースレター  
2014年（平成26年）第7号・新使徒教会日本教区発行

The Newsletter of the New Apostolic Church Japan Number 7, 2014

〒206-0014 東京都多摩市乞田 1320(本部) Tel. 042-374-0070

〒799-2468 愛媛県松山市小川甲 110 番地 17 Tel. & Fax. 089-994-3556

編集者：ヴォルフガング・R. アーデ Tel 090-6923-0115

矢幡 賢治 E-mail: nac\_matsuyama@ybb.ne.jp

(Our Family 2014年7月号 EDITORIAL より)

## イエス・キリスト、私たちの手本

イエス・キリストを手本として——同等にはなれないことを常に心に留めながら——イエス・キリストのように成長したいと思うことは、私たちにとって当然であります。しかし、手本にするというのは実際にどういうことを意味するのでしょうか。説明するために、イエス・キリストの受けた苦しみを事例に挙げたいと思います。苦しみを称えようというわけではありません。苦しみが私たちを贖うわけではないのです。私たちを贖えるのは神の愛だけです。称えるべきは、イエスの苦しみと死を通してもたらされた神の愛なのです。すなわち人類に対する神の愛であります。とはいえ、イエスが死なれた際に起きたいくつかの出来事から、私たちは学ぶことができます。

死刑となったイエス・キリストには罪状がありませんでした。しかし告発を受けてもイエスは何も反応されなかったのです。その気になれば御自身を守ることもできたでしょう。相手を逆に告訴することもできたでしょう。告発した人物を肅清することもできたでしょう。しかし実際にイエスはどうされたのでしょうか。ただ沈黙を守られたのです。すべての状況が天の父の御手に委ねられることを御存知だったからです。

告発を聞くと、私たちはどう反応するのでしょうか。すぐに被告人探しをするでしょう。自己防衛をし、他人を責めるのです。ほとんどの場合、本当に問題のあった人物をなんとかしてでも見つけようなどと殊勝なことは考えません。それで「あいつが悪い! あの人を責めるべきだ」と、告発というか非難をし始めるのです。こうした問題が生じた時、もしすべてが神の御手に委ねられるという認識があるなら、告発すべき被告人を必死に探そうとは思わなくなるでしょう。他人からストイックだなあ、などと言われても、静かに落ち着いていればよいのです。生じている問題は神から出たものだからです。

イエスは、御自分が十字架に磔にされていた時、こう祈られました「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」またこうも祈られました「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」そして最後にこう祈られました

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」イエスは十字架の上においても、御自分を苦しめた者のために祈り、天の父と繋がろうとし、語りかけられたのです。聖書に「彼らは、…祈ることに熱心であった」と書いてあります。これをどう理解すべきでしょうか。礼拝であります。祈りは、会衆が集う礼拝において、重要な部分であります。会衆が礼拝に集うのは説教を聞くためだけでなく、一緒になって神に祈りを捧げるためでもあります。祈りの会衆となるのです。神を崇め、執り成し、感謝を捧げ、悩みや嘆願を打ち明けるのです。何が起ろうと、私たちはこの祈ることの必要性を心に留めましょう。

そして、イエスは神に何と言われたのでしょうか。「父よ、彼らをお赦してください」と言われました。イエスは神に、御自分の父として話しかけられました——御自分が苦しんでいる一連の出来事が起こるのを是認した神、御自分を救おうとしなかった神に、父よ、と語りかけられたのです。イエスはこうも言われました「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」——一連の出来事が起こった後も、「わが神」であること変わりはありませんでした。「もうわたしの神などではない。自分を助けてくれなかった神など、受け入れられない!」とは思われなかったのです。そうです。それでもイエスの神だったのです。その後イエスは次のように言われました「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」イエスは御自分がどれほどひどい目に遭わされても神を無条件に愛されました。私たちがこれに見習うべきです——たとえ神のことや世の中のことが理解できない、物事が自分に不利に運んでいる、神は自分を見捨ててしまったのではないかと感じた時も同様です。そう感じた時は、「それでも神は自分の父、自分の神である」ということを思い出しましょう。神と肩を並べることはできませんが、私たちの手本であります。神の恵み無しには何もできませんが、神のように成長できるよう努力しましょう。「すべては神からもたらされる」ことを常に心に留めましょう。すべては神の御手に委ねられているのです! 決してあきらめることなく、天の父に祈り続けましょう。

主使徒の礼拝より

## 主使徒、ドイツを訪問

2014年2月23日、ドイツ・ドルトムントで行われた礼拝の中で、ジャン＝ルーク・シュナイダー主使徒はアーミン・ブリクマン教区使徒の定年による退任を決定し、その後継者としてライナー・シュトルク教区使徒補佐を任命しました。



ドイツの北部ライン及びヴェストファーレン教区を統括する指導者として、ライナー・シュトルク氏が就任しました。シュトルク教区使徒は、ラインラント教区とヴェストファーレンの教区が1955年に一つの教区になって以来、七代目の教区使徒となります。主使徒は、引退するブリクマン教区使徒が真の主の大使であったとして、特別な謝意を示しました。ブリクマン教区使徒は、自らの職務に対する感覚によって、主を深く信頼しました。主使徒はブリクマン教区使徒にこう述べております「あなたは神がお遣わしになったすべての所へ行きました——つまりあなたはいつも主を体験できたということです。」そしてブリクマン教区使徒が非常に謙虚な姿勢で職務に取り組んできたことについて、主使徒は次のように述べています「勝利がいつも主からもたらされることをあなたはいつも意識していました。」アーミン・ブリクマン教区使徒は31年間使徒として、そのうち9年を教区使徒として奉仕しました。



ブリクマン氏の後継者であるシュトルク使徒は、2012年から教区使徒補佐としての職務を行ってきました。シュナイダー主使徒はシュトルク氏を「愛に溢れた人物」と評し、次のように述べました「その愛が成長して、この大きな教区に属すすべての信者を、教区に属すすべての国々と共に、等しく愛することができますように、私はお祈りしております。」

大きなホールで行われた礼拝には、1,950名を超える教会員やゲストが出席しました。また北部ライン及びヴェストファーレン教区とヨーロッパの他教区、それにアフリカの教区が衛星中継によって結ばれて、約31,000名がこの礼拝に参加しました。

フランク・シュルト



### <礼拝記録>

日付：2014年2月23日(日)

場所：ドイツ・ドルトムント(ヴェストファーレンホール)

担当教区使徒：アーミン・ブリクマン(ドイツ・北部ライン及びドルトムント教区)

開会讃美歌：「全能の神、御名を称えん」(49番 [英語版 = ドイツ語版 255番])

出席使徒：ノエル・パルネス(南アフリカ)、ウルス・ヘーバイセン(フィリピン)、アーミン・ブリクマン、ミハエル・エーリッヒ、ヴィルフレット・クリングラー、ベルント・コーベルシュタイン・リュディゲル・クラウゼ、ヴォルフガング・ナドルニー(ドイツ)各教区使徒；北部ライン及びヴェストファーレン教区所属の使徒、パヴェル・ガモフ(ロシア)、ペーター・クレーン(オランダ)、イェルグ・シュタインブレナー(ドイツ)

人事：アーミン・ブリクマン教区使徒退任及びライナー・シュトルク教区使徒就任  
中継：アルバニア、アルメニア、アゼルバイジャン、グルジア、コソボ、ラトビア、リトアニア、マルタ、オランダ、ポルトガル、アフリカ大陸内の六教会  
出席者数：約31,500

# 「国と力と栄えとは…」



## 「国と力と栄えとは限りなく汝のものなればなり アーメン。」\*

敬愛する兄弟姉妹の皆さん、本日は特別な日曜日です。まず一つ目として、皆さんに奉仕をして下さった教区使徒が引退をされます。そして二つ目に、それに伴い新しい教区使徒が任命されます。この機会に、私たちは過去を振り返ることもさることながら、未来にも目を向けることができます。過去についてはどう表現すればよろしいでしょうか。簡潔に申し上げれば、過去については、神を称え、神の僕に感謝を申し上げます。これに尽きると思います。では未来についてはどうでしょうか。これもごく簡潔に申し上げれば、神を信頼し、新しい教区使徒と共に引き続き働き前進するということであります。そして本日は、故人のための準備礼拝でもあります。故人のための礼拝の準備をする際、いつも特別な思いに掻き立てられます。故人のための礼拝があわただしい日常生活の中で埋没してしまわないように、準備をしておく必要があります。このことは皆さんも同じ思いでしょう。

\* <訳者注> 英語版聖書ではマタイによる福音書 6 章 13 節の一部になっていますが、日本教区が採用している新共同訳日本語聖書には含まれていません。プロテスタントの日本語訳聖書では、明治元訳聖書にはこの部分も含まれていましたが、大正改訳以降の聖書では削除されています。

さらに本日の礼拝には別の側面があります。つまり、この礼拝は特に兄弟姉妹である皆さんのための礼拝であり、私自身のための礼拝でもある、ということです。私は——自らの経験から——ある事実を意識しております。それは、私たちが慰めと力と勇気を得るためには神による特別な体験が必要である、ということです。

引退、任命、故人のための礼拝準備、そして本日ここにお集まりの神の子一人ひとりが与る慰めと力と勇気について、じっくり考えると、これらすべてを包括する聖句を見つけ出すことは簡単ではありません。

最近私は、キリストの教会が果たすべき任務とキリストの教会が存在する目的についてよく考えます。教会には、人類に救いをもたらす、という任務があります。さらにもう一つ、神を称え崇めるという任務があります。そういう観点から、本日の聖句を導き出しました。するとなんとこの聖句が、引退式や任命式、それに故人のための礼拝準備、そして私たち自身の教化や励みに、完全に合致したのです。

神を崇め褒め称える会衆には、陰府にいる魂にも訴えかける強い説得力があります。過去を振り返れば、神を称え崇める理由が私たちめいめいにあります。神に感謝し神を崇めることによって、私たちは強められ、未来への信頼と確信が増していきます。

本日は私たちが良く知っている言葉であります。「国と力と栄えとは限りなく汝のものなればなり。」主の祈りの結びであります。英語版の聖書にはこの聖句の前に「なぜならば」という意味を表わす単語がついています。これについてはこの聖句が書かれている文脈を考えなければなりません。これの前には「悪より救い出したまえ <新共同訳 = わたしたちを誘惑に遭わせず、/ 悪い者から救ってください >」と書かれていて、それを受けて今回の聖句が続いています。

悪魔は荒野におられたイエスを誘惑しようと、彼のところにやって来ました。悪魔はこの世のすべての国々をイエスに見せて「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう」(ルカ 4:6) と言いました。これはいわば、悪魔の自己啓示でした。これはこんにちにおいても変わっておりません。悪魔がこの世を支配し、悪魔の律法が強制力を持っている間は、この悪魔の自己啓示なるものを体験することになります。この世は悪の力に支配されているのです。お金の力もそうですし、それ以外の力もあります。確かに悪魔は、この世の栄光を欲しいと思っている人に対してそれを提供します。私たちはこの世の成功など欲しいと思っておりませんし、悪魔の律法ではなく神の律法の正しさを確信しておりますので、多くの不正、不公平、粗暴、拝金主義に苦しみます。私たちはこうしたことと戦わなければなり



(左より)ナドルニー、コベルシュタイン、プリנקマン、クリングラー、ヘーバ  
イセン、バルネス各教区使徒

ません。ですから「悪より救い出したまえ」と神様にお願  
いするわけです。自分自身の心の中を覗いてみると、私  
たちの心の中にまで悪魔が活動し影響を与えているこ  
とがわかります。そういう意味においても「悪より救い  
出したまえ」と嘆願をします。そして会衆は、信仰を  
告白し神を崇める意味で「国と力と栄えとは限りなく  
汝のものなればなり」と唱和します。

詩編 135 編 5-6 節に次のように書いてあります  
「わたしは確かに知った／主は大なる方…天にお  
いて、地において…主は何事をも御旨のままに行  
われる。」この言葉をけさ私たちの心に刻み付けたい  
と思います。そうです、主は偉大なお方であり何事  
においても御旨のままに行われる、ということを確認  
に知った、ということです。

神はどのようなことを願っておられるのでしょうか。  
人類を救いたいと願っておられます。人類と永遠の  
交わりを持ちたいと願っておられます。これは神の御  
旨であります。神による救いの御計画を妨害させたり  
中止させたりできる者は、人であれ悪魔であれ誰も  
いません。主が支配者なのです。

もちろん今は悪魔がこの世の支配権を握っています。  
しかしこのことをどう理解すべきかについて、主は非  
常にわかりやすく解説をしておられます。つまり、良  
い種の喩え話をういて「天国は、良い種を自分の畑  
にまいておいた人のようなものである」と述べておら  
れます。これによれば、この人の敵がその日の夜に  
現れて、良い種を蒔いた畑の中に毒麦の種を蒔きま  
した。畑に蒔かれたためが芽を出して収穫の時期にな  
った時、毒麦も同じように成長したので、みんなは驚  
きました。しかし主は人々に、おびえてはならないと  
仰せになりこう仰せになりました「刈り入れまで、両  
方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時

時、『まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は  
集めて倉に入れなさい』と、刈り取る者に言いつけよ  
う」(マタイ 13:24-30 参照)。そういうことなの  
です。今も悪魔の力、悪魔の支配に苦しんでいます。  
だからといってどうかおびえないで下さい。悪が勢力  
を持っているからといって恐れる必要はありません。  
神による良い種が芽を出し、成長し、永遠に生き続  
けるからです。大切なことがあります。それは、神の  
御国は永遠である、ということです。「国…は限りなく  
汝のものなればなり。」最終的に支配するのは神な  
のです。

この御国を、主は御旨にある者たちにお与えに  
なります。御旨にあるというのは神のどうい  
うご判断なのでしょう。神はある時、御自分の御  
国を受け継いだり御国に入ったりするためには水と  
霊によって新たに生まれなければならない、と仰せ  
になりました(ヨハネ 3:3, 5 参照)。さらに天国  
は心の貧しい人たちのものである、と説かれました  
「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はそ  
の人たちのものである」(マタイ 5:3)。心の貧  
しい人とはあまり利己主義にならず、神に物事を  
お任せし、神のお考えや神の御旨を自分の考え  
や意志より優先させる人のことでもあります。心の  
貧しい人は傲慢や横柄ではなく、謙虚であります。  
またある時主は、天国は幼子のような者たちの  
ものである、と言われました(マタイ 19:14 参  
照)。幼子という喩えも言おうとしていることは同  
じであります。つまり、主は御自分の御国を、謙  
虚な人たちに与えて下さる、ということです。言  
い換えれば、私たちの知恵や実績や経済状況や社  
会的地位や素性によって御国に入れるかどうか  
が判断されるわけではない、ということです。唯一  
判断材料となるのが、謙虚さなのです。これは大  
変うれしいことです。また主は、御国を小さな  
群れに与える、と仰せになりました。「小さな群  
れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の  
国をくださる」(ルカ 12:32)。私たちは、群  
れのあまりの小ささに悩むことがあります。皆  
さんも「我々の組織が次第に縮小しつつある  
のではないか」と思うことがあるでしょう。主  
は、全世界に御国を与えようとは言っておられ  
ません。小さな群れに与えると仰せになったの  
です。御自身について行く者たちに与えると  
仰せになったのです。ですから恐れる必要は全  
くないのです。御国を小さな群れに与えるこ  
とが天の父の喜びなのです。「国と…。」神  
は全能のお方あります「わたしたちの神は…  
御旨のままにすべてを行われる」(詩編 115:3)。  
しかも神は人類が救われることを願ってお  
られます。今のところ悪魔はまだ活動して  
いますが、その支配は一時的です。それに対  
して神の御国は永続的です。神の支配は永  
遠です。神の御言葉は決定的です。

今回の聖句が「国」の次に言及しているのは「力」  
であります。

## 神を称え崇めるために、共に集う

神は全能です。神の力や強さを享受するためには、神の御旨を実行する必要があります。神の力を享受するのに信仰と従順が必要であることは、これまでも変わりありません。信じない人、信仰に不従順な姿勢で物事を行う人は、実際問題として十分に神の力を享受することができません。イスラエルの人々について考えてみましょう。彼らは紅海を目の前にして慌てふためきました。ファラオとその軍勢が背後から近づいてきたからです。イスラエルの人々はここで殺されてしまうに違いないと思いました。そこでモーセは彼らに言いました「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」(出エジプト 14:14)。実際モーセの言ったとおりにになりました。イスラエルの人々は荒野を旅している時にアマレク人の攻撃を受けました。彼らはまた恐れ慌てふためきました。この時はアマレク人と戦うことを命じられました。ヨシュアは次のようなお告げを受けました「男子を選び出し、アマレクとの戦いに出陣させるがよい」(出エジプト 17:9)そこでヨシュアは軍勢を集めました。そしてアマレク人を打ち負かしたのです。イスラエルの人々は神の力を肌で感じたのです。彼らの前にエリコの壁が立ちだかった時も、神は力をお示しになりました。モーセはイスラエルの人々に、静かにしていなさい、と命じましたが、神は彼らに、角笛を吹いて闘<sup>とぎ</sup>の声をあげなさい、と命じられました。彼らは神から命じられたとおりに行い、エリコを占領しました。神が人々に下される命令はその都度異なります。「神様が私たちに何を命じようとしているのかは、実際のところ神御自身もわからないのではないか。だってこの前は静かにしていなさい、と命じたのに、今度は、大声を上げなさい、と命じたではないか。」しかしそういうことではないのです。彼らは信じて従っただけなのです。ですから神が万能であることを体感できたのです。同じことはこんにちにおいても言えます。つまり神の万能性を体感したい人は、信じて従順であることが必要なのです。

神はどのようにして御自身の力をお使いになるのか、皆さんは知っておく必要があります。神が御自身の力をお使いになるのは、非常に特別な目的がある場合です。神が目標としておられることは、人類の救済であります。私がかつて担当していた教区のある教役者がいつもこんなことを言っていました「障害物と言っても、私たちの救いに妨げとなっているものだけを、神様は取り除かれるのです。」これは非常に聡明な発言です。障害物が私たちの救いに妨げになっていなければそのままにして、その障害物を私たちが克服するために必要な力を、神は私たちに下さるのです。

イエスは、御自分は神の御子である、と仰せになりました。すると人々は大変びっくりしました。石をイエスに投げつける者さえいました。しかしイエスがこの世を離れる時はまだでした。この時イエスはどうされたでしょうか。その場を歩いて去って行かれました。誰一人としてイエスを引き留めることはできませんでした。神はこうしてイエスが逮捕されないように事態をお導きになったのです。後日似たようなことが起きましたが、その時はまったく異なる事態になりました。人々はイエスを逮捕し、最高法院に連行しました。神の対応はまったく異なったのです。神の力はまったく異なる形で現されたのです。神は御子に、最後まで全うする忍耐力をお与えになったのです。

「…力と…」神の力とはどう表現されるべきでしょうか。それは愛の力によって表現されます。一般的に神は誰に対しても強制されません。誰にも圧力をかけるようなことをなさいません。悪魔と違い、神は無理強いをなさらないのです。人々の自由な意思に任せるのです。愛による働きしかなさらないのです。たとえば人が神を否定するようなことを言っても、神はその人が御自身を受け入れるまで、絶えずその人に御自分の愛が感じられるようにします。このことも私たちは常に理解できるとは限りません。なぜ執り成し以外のことまでして下さるのか不思議に思うことがあります。しかし、私たちに愛の力をかけて下さることを、私たちは非常にうれしく思いますし、そのことに感謝の思いになることは確かです。ですから愛以外のことまで神にお願いしないようにしましょう。「…力と…」愛の力には永遠に及ぶインパクトがあるのです。

聖句はさらにこう続きます「…栄えとは限りなく汝のものなればなり。」悪魔が主イエスにこの世のあらゆる繁栄を見せて「わたしはこれと思う人に繁栄を与えよう」言いました。この世がもたらす繁栄については私たちが知っている通りです。テレビのスイッチを入れればそれが映し出されますし、私たちの周囲にもあります。この世の繁栄が非常に興味深い存在であることは確かです。しかしここで話題にする繁栄とは、それとはまったく異なる、神の栄光であります。イエス・キリストを通して



神は無理強いをなさらず、自由意思に委ねられる

私たちに示された神の栄光は、他の一切のものを超越していません。私たちにとって主イエスより偉大で気高い存在は他にありません。主こそ神の栄光であり、最も大いなる存在、最も美しい存在であります。神の御子であるイエス・キリストによって——キリストの愛、キリストの力、キリストの忍耐、キリストの勝利によって——私たちは神の栄光に出会うことができます。こんな素晴らしいことはありません！もしすべてのキリスト教徒が、神の子たちである私たちが自分たちの求めている栄光に出会えるならば、なんと素晴らしいことでしょうか。そして私たちにとってこの栄光は、その栄光の中に入ることを召されているという事実にあります。つまりイエス・キリストとの交わりを持ち、神と対話をすることができるのです。このことを私たちは目指しているのです。使徒パウロによれば「わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます」(コリントⅡ 4:17)。こんなうれしいことはありません！私たちの栄光はイエス・キリストであります。私たちの目標はイエス・キリストと交わりを持つことであります。愛する兄弟姉妹の皆さん、神への深い信仰によって私は申し上げますが、皆さんはきっと、この栄光があまりに素晴らしいものであるため、他の一切のことを忘れてしまうでしょう。「でもあの時散々苦しんできた。あんな戦いもあった。こんな恐ろしいこともあった」などと過去を思い起こす人など一人もいないでしょう。いったん神の栄光を見、その栄光に加わったら、みんながこう言うでしょう「これは実に素晴らしい。他のことなどどうでもいい。」

今はこんなことを言う人もいるかもしれませんが「あ～あ、ただだよ。『ただ待っていなさい。最後にはすべてが良くなるから』という約束を先延ばしにされているよ。」しかしこの考え方は間違っています。栄光はすでに明らかにされているはずなのです。私たちの目標にしても同様です。「…栄えとは限りなく汝のものなればなり。」永遠だけでなく、今すでに実現しているのです。神は私たちの内面において栄光ある存在となることを望んでおられます。私たちが神の統治を受け入れ、神の力が自分たちに働いていただくようにすれば、私たちにも神の栄光が臨みます。そしてすでにこんにちにおいて、神が私たちの内面ににおられ私たちに働きかけて下さることの素晴らしさを感じることができます。すでにこんにちにおいて、ある程度神の栄光を見ることができるのです。ですからすでにこんにちにおいても神の栄光を称えるべきです。私たちの内面で神の栄光を称えます。私たちは神にあるのです。神の栄光を称えましょう。そうするならば神が私たちのためにして下さった素晴らしいことを、周囲の人々にわかってもらうことができます。「非常に素晴らしいことが行われている。彼らは変わってくれた」と、私たちが感じることができるのです。

故人のための礼拝準備に話を戻します。この世と陰府における神の子たちが勤めとしていることは、神を崇め、称え、神に感謝を捧げることであります。これを実践している会衆には強

い説得力があります。そして陰府にいる魂が私たちの活動を見た時に、「そうだ。自分たちも完全でない。みんな罪を犯す。でもすでにある程度は神の栄光が表されているから、なんとなくわかる」という風に、彼らが気づいてくれるのです。これは魅力的です。そして主が再臨され私たちを御許に迎えて下さる時、私たちは皆一緒になって新しい歌を歌います。どんな歌でしょうか。「主こそ王。国と力と栄えは我らの神のもの」と歌うのです。これは永遠に歌われる讃美の歌です。教会は永遠に歌うことを目指します。主こそ王です！国と力と栄えとは永遠に主のものであります。

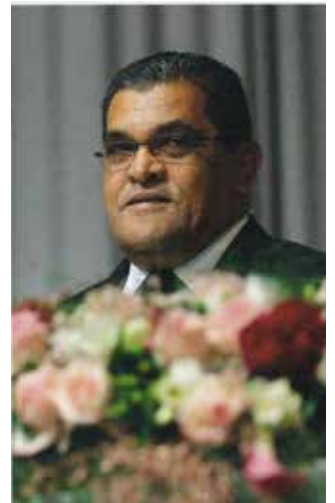
ノエル・バルネス教区使徒：

…私はけさ、非常にたくさんの方々がおられるこの場を見回しながら、「自分は強いのだ」と感じました。普通、大きな集団を見ると、その集団はきっと強いに違いない、と思うものです。しかし集団が大きいからと言って、必ずしも強いとは限りません…。私はギデオンを思い起こします。彼は戦いに臨もうとしていました。当初、彼は大きな軍勢を抱えていました。主はギデオンに、その数が多いに多すぎる、と仰せになりました。そこで兵士を選択して一万人にしました。しかし主は「それでもまだ多い」と言われました。戦争をしようとする時は、兵士は多ければ多いほど有利であるのが普通です。兵士を減らすというのはおかしい話に思えます。ここで主はギデオンに大切なことを言われました「あなたの率いる民は多すぎるので、ミディアン人をその手に渡すわけにはいかない。渡せば、イスラエルはわたしに向かって心がおごり、自分の手で救いを勝ち取ったと言うであろう。」つまり、わずかな人数でこの戦いに勝利すれば、それが主の助けのおかげであることを理解できる、というわけです(士師記 7:2 参照)。

私たちは、神は力である、ということ学びました。神が力であることを悟るならば、私たちは慰めと強さと希望を得ることができます…。

アーミン・プリンクマン  
教区使徒：

…素晴らしい礼拝です。私たちは素晴らしい御言葉をいただきました。私自身、主の祈りを何回唱えてきたかわかりませんが、ざっと計算してみたところ、六千回か七千回くらいは唱えたことになりました。しかし、今後主の祈りを唱えるたびに、私は今日の礼拝を思い出して、神を賛美し栄光を称えることの意味



ノエル・バルネス教区使徒

を、主使徒が極めて素晴らしい方法で説明して下さったことを思い出していくと思います。「神よ、御国はあなたのもの、御力はあなたのもの、御栄えはあなたのもの。」そしてこの御国、御力、御栄えこそ、私たちが紛れもなく目指す目標なのです。ではどうすればその目標に到達できるのでしょうか。その答えは、先ほど聖歌隊が教えてくれました。つまり神の御言葉のもとにあり続け、御言葉を私たちの魂に浸透させ、御言葉に従って行動することなのです。

実は、聖歌隊が歌って下さった讃美歌の歌詞は、私の人生において大きな役割を果たしました。私が堅信礼を受けた時に、



アーミン・ブリックマン教区使徒

その祝福をしてくれた使徒が、小さなサイン帳にこの言葉を書いて私にプレゼントしてくれたのです。そこにこんなメッセージも書かれていました「この言葉が君の人生を導いてくれるように。」私の在職期間を振り返ってみて、言うことは「このことが実現した」ということです。神の御言葉は私の人生と成すべきことを与えてくれました。人生を歩む中で光となって導いてくれました。これからも私たちの信仰を必ず導いてくれます。絶えず神の御言葉を見つめ、御言葉を携え、御言葉のもとにあるならば、目標に到達することができるでしょう。…



ライナーシュトルク教区使徒補佐

#### ライナー・シュトルク 教区使徒補佐：

…神の御業に私たちが従事するのはなぜでしょうか。そ

して何を行うのでしょうか。神は私たちに職務をお委ねになりました。ですから何よりも御業に従事したいと思います。私自身もそうです。自分のためにあるいは人間として御業を優先したいわけではありません。会衆や教区は私のものではありません。イエス・キリストのものです。教会員は神の子です。私は、自分のすることがすべて正しいなどと強引に主張するような人物になりたくありません。使徒や兄弟や教役者は、イエス・キリストによって遣わされたのであって、私が遣わしたわけではありません。私たちは、イエス・キリストからもたらされる力を伝えていきたいと思っています。最後にブリックマン教区使徒の言

葉で結びたいと思います「…『神に栄光を捧げよう』ということ

を私たちのモットーとすべきです。」…

シュナイダー主使徒：

一堂で聖餐を執り行う恵みが与えられました。私は聖餐の式次第が好きです。ここでも、神を称え崇める、という教会の目的がわかるからです。そもそも聖餐は感謝の食事です。聖餐を通して、信仰に忠実な会衆の人たちが神の愛に感謝し栄光を称えます。主はこう仰せになりました「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である」(ヨハネ 15:13-14)。けさは特に意識して神に感謝しましょう。「御国は神のもの」という意識をもって神の栄光を称えましょう。力も神のものです。主は陰府と死に勝利された、といっても頻繁に言われていることなので新鮮味がないのはわかりますが、愛する兄弟姉妹の皆さん、このことについて数分かけて考えてみて下さい。主は陰府と死に勝利されました。ですから主は皆さんのところに来て下さいます。そして「わたしのもとに来なさい。あなたが臨むなら、あなたを助けることができます。あなたも勝利できます」と語りかけて下さいます。

愛の力。恵みが必要であることを、私たちはわかっています。具体的に主は何をして下さるのでしょうか。愛の力を駆使して下さい。責め立てるようなことをなさいません。誰一人見捨てるようなことをなさらず「もう一度頑張ってみなさい」と励まして下さいます。私はこうして愛の力を感じます。主が私をご覧になれば、私の欠点や罪が見えてしまいます。すると主が来て下さいます。私は時々失望感にさいなまれて「主よ、私にはどうしてもできません」と申し上げることがあります。そうすると私のところに来て「もう一度頑張ってみよう」と励まして下さいます。けさ、兄弟姉妹の皆さんにこうお尋ねします「もう一度、悪に勝利しよう頑張ってみませんか。本気で主について行こう、福音を実践しよう頑張ってみませんか。もう一度赦してあげよう頑張ってみたらいかがですか。もう一度和解しよう頑張ってみませんか。もう一度従順になろうと頑張ってみませんか。」

主が私たちに期待していることは一つだけです。それは、もう一度頑張る、ということです。私たちに気持ちがあれば、主はこう言って助けて下さいます「あなたに力を与えよう。信じるならば、従順ならば、あなたは私の強い力を感じるだろう。」そうすると私たちはもっと優れた方法で主の栄光を称えることができます。日曜礼拝の終了後、週中礼拝の終了後、その都度私たち自身に変化を感じられることが私の夢です。「おや、何かが違う。」礼拝後に変化や違いを感じられるならば、神からしていただいたことを自覚できるならば、素晴らしい方法で主の栄光を称えることができます。



写真上：引退するプリンクマン教区使徒

写真下：教区使徒の任命を受けるシュトルク教区使徒補佐

## 「国と力と栄えとは限りなく汝のものなればなり アーメン。」

- 「国と…」：  
御国は神のものです。神は大いなる方であり、何事をも御旨のままに行われます（詩編135：5,6 参照）。
- 「…力と…」：  
神は御自身の力を非常に限られた目的、つまり人類が救われることのために活用されます。
- 「…栄えとは限りなく汝のものなればなり」：  
神の栄光はイエス・キリストによって啓示されます。神が私たちのために準備された栄光の壮大さは、すべての試みや誘惑を忘れさせてしまいます。

(英語版 Our Family 5月号 REFLECTIONS より)

## 癒しは近くに

何通かの手紙が目の前にあります。その内容は読むに堪えないものです。その手紙を書いた人たちは、幼少時代に親がアルコール依存症であったために恐ろしい経験をしているのです。その手紙には彼らの体験した恐怖、絶望、罪悪感が綴られているのです。また手紙には、こうした人たちから信頼され子供たちの惨めな体験を見てきたであろう多くの人たちの失敗について書かれています。

また職業のこと、家庭内の悩み、教会の仕事、思春期を迎えた子供との衝突によって疲弊した両親による虐待といった内容もあります。思春期の子供が自信喪失になったり羞恥心を感じたりすることはよくあります「体育の授業で私がけがを負わされたことをどう説明すればよろしいでしょうか。」ある姉妹は、

「おじ」から不適切な誘惑を受けている、と手紙で訴えています。

幸運なことに、子供時代に暴力を受けなかった人もたくさんいます。子供の時に愛されてきた多くの人たちは、教役者、親類、兄弟たちの信仰によって、話を聞いてもらえたり救いの手を差し伸べてもらったりすることができたのです。このような人たちは神様に感謝すべきです。また、子供から秘密を打ち明けられた人の多くは、勇気を出して加害者への働きかけを行ったり、暴力行為を防止したり、加害者と被害者の双方に援助を行ったりしてきました。これも神様に感謝すべきことであります。こうした働きかけや援助をした人に対しては心からの感謝を受けるに値します。

子供の福利への侵害が明るみに出ることによってわかること



は——最近ではメディアが注目しているものの——社会の大部分が子供への虐待事実が明らかでありながら長年にわたって目を背けてきた、ということでもあります。しかし状況は改善されてきました。こんにちでは子供への虐待を深刻に捉え援助をしようとする人が増えております。

虐待を受けた子供の多くはその経験をすぐ忘れてしましますが、子供の時に受けた傷を長い間忘れられない子供も少なくありません。もちろん当時の出来事は大人になって口にしたくありませんし、思い出したくもありません。しかし、そういう人が、自ら進んで「自分を虐待した人を赦してあげましょう」と言える決心をすることは、おそらくと可能だと思えます。私たちの天のお父様は、私たちの内面も外面もご存知です。私たちが赦せることもあれば赦せないこともあるということを御存知なのです。私たちは天の父の御手の中にあります。天のお父様だけが正しいのです。私たち人間はすぐに隣人を赦すことが必要です。あるいは「第四の戒めを思い出しなさい!」とか「ほら、イエス様はあなたが敵を愛することを期待しておられるよ」と言って穏やかに警告することが必要です。確かに赦すというのは、イエス様が登頂をお命じになっている山の頂上のようなものです。その頂上が高いかどうかは人によって様々です。登頂を始めるのにどれだけ低い所から出発しなければならないかによって違います。また頂上に直接向かう道があるとは限りません。頂上が見えてい

て、とても近そうに見えても、大回りをしなければならない場合があります。神の癒しが近いこと——つまり礼拝、御言葉、<sup>サクラメント</sup>聖礼典を通して神が近くにいて下さること——を信じるならば、頂上までの険しい道のりにおいて助けていただくことができます。そしてこう確信することができます「天のお父様は自分の問題をわかって下さる。話も聞いて下さる。慰めと力を与えて下さる。」だからといってけがをしないうで済むわけではありませんが、もっと楽に傷が直ります。神様から愛されることによって強くなれます。そして隣人を許すというこの山を、信仰によって動かすことができます。そして赦しに至る門が開かれるのです。



引退するプリंकマン教区使徒に花束を贈呈するクリングラー教区使徒

(アーデ牧者より)

## ペンテコステを世界中の友人と共に——新使徒教会国際大会

6月6日から8日にかけて、ドイツ・ミュンヘンのオリンピック記念公園において、「実に、神の国はあなたがたの間にある」をモットーに国際大会が開かれ、約五万人がペンテコステ礼拝に参加しました。<以下、“ ”部は主使徒のメッセージです。>

ペンテコステ礼拝は衛星及びインターネットを介して発信され、世界中の新使徒教会員がこの礼拝に参加しました。ミュンヘンにあるオリンピック競技場には五万人が集まりました。午前十時の礼拝開始時には、気温が三十度に達していました。主使徒は開会の祈りの後、2014年の標語である“実践による愛——愛による実践”を再度引用しました。この標語は2014年だけのものではなく「常に私たちの信仰生活の一部となるものです。愛は、信仰の目標であるイエス再臨の準備をするに際して、無くてはならないものです。」

礼拝の基調聖句として、主使徒はローマの信徒への手紙5章5節を引用しました“希望はわたしたちを欺くことはありません。わた

したちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。”

この聖句が最初に述べていることについて主使徒が強調したのは“神は御自分への信頼を欺かない”ということでもあります。“私たちは主の再臨を希望しています。救いを希望しています。主に援助していただけることを希望しています。そしてこの希望は神の愛に基づいています。イエスは、どんな被造物も私たちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から私たちを引き離すことはできないことを、人類に約束されました。”こうして主使徒は「希望はわたしたちを欺くことがない」という約束を再確認しました。

次に主使徒は、神の愛がもたらす効果について説きました。“愛が私たちの心に注がれたら、それを絶えず成長させていかねばなりません。”このことは、私たち一人ひとりが常に自分の心をチェックしなければならないということです。つまり私たちの心が神や隣人への愛に占められているかどうかを点検しなければならない、ということです。“私たちの存在全体が神や隣人への愛に満たされていない

ればなりません。”神は私たちの手本です。つまり神が人類にもたらして下さることは、たくらみも、条件も、損得勘定もありません。“神は良い人にも悪い人にも同じように太陽を昇らせて下さいます。神は私たちを愛して下さいます。そして与えて下さいます。”食事に招く場合はお返しができない貧しい人を招きなさい、とイエスは言われました。“愛するということは、損得もたくらみも考えずに与えることです。”

愛について、主使徒は、信者が覚えておいてほしい有名な聖句を紹介して下さいました「受けるよりは与える方が幸いである」(使徒言行録 20:35)。“つまり、与えることによって、神に近づき、イエス・キリストとの交わりに近づくのです。神の愛が活動する所であればどこにおいても、与えようという気持ちになります——なんの見返りも期待せずに。”

主使徒は、カップルや家族を巡る実態を具体例を挙げて解説しました。“こんにちにおいて顕著ですが、結婚が共通の利益を持つ者同士の交わり程度にしか考えられておりません。互いに理解が得られる時にしか一緒にいない、という状況がよくあります。与える分だけもらうことを、互いに期待するのです。これは喜ばしいことではありません。”さらに、神を愛することと、受けるより与えるほうが幸いであることを若い時から理解できるようにするのは、子供に対する親の責任である、と主使徒は述べております。

主使徒はもう一つの実態を紹介しました。皆さんもお気づきでしょうが、会衆もこんにちの社会による影響を受けているということです。行動様式が消費者優先に向かっているのです。“消費者優先に流れることは教会にふさわしくありません。すべての投資に結果を求めたり見返りを期待したりするのは誤りです。問題は目に見える成果を得ることではありません。重要なのは、能動的な愛——見返りを求めない愛なのです。”主使徒はこのメッセージを、アフリカを初めて世界各国の会衆に向けて送りました。教会の方から何かをしななければならない、という論調がしばしば聞かれますが、受け取ることよりも与えようとする努力の方が大切なのです。

閉会にあたり主使徒は、このような形で国際大会の開催を可能にしたすべてのボランティアの人たちに感謝しました。

次に、2013年のペンテコステをもって引退したヴィルヘルム・レーパー前主使徒大喝采を浴びながらステージに上がり、世界中の聴衆に短く言葉をかけられました。

ペンテコステ礼拝は、国際大会の公式ソングである【Singt ein Lied von Gott】(「神の歌を歌え」)で閉会しました。

国際大会は日曜日の午後6時まで行われました。クーベルタン広場で行われていた各教区ブースの展示もこの時間をもって閉幕しました。ブースの展示では、東・南アジア教区に所属する日本のある姉妹が折り紙を披露しました。

開会セレモニーでシュナイダー主使徒は次のように言われました“皆さんとともにこの祝祭を開会されたことを、私たちは非常にうれしく思います。皆お互いに多くの素晴らしい出会いができますように願っています。この国際大会の会期中に、兄弟姉妹が自分との類似だけでなく相違も体験することで、相互理解を深めていただきたい。ものすごい数の皆さんが私に喝采を送ってくれますが、はっきり強調し

ておきます。私はただの人であり、神の僕に過ぎないのです。”

開会前から、観衆は拍手をしたり歌を歌ったりウェーブをしたりして、明るい雰囲気を作り出していました。活気に溢れたスタートで、各国の代表者がオリンピックスタジアムに入場しました。国旗を持った104名の青年たちが二つのグループに分かれてトラックを行進し、国旗をステージ上に掲げました。

次に、五大大陸の代表がビデオ上映や演舞を交えながら自己紹介を行いました。世界中にいる教会長や教会員から送られるメッセージが伝えられると、盛大な拍手や愛情のこもった笑いが繰り返されました。そして、信仰以外に新使徒教会を一つに結び合わせるもう一つの要素である、豊かで多彩な愛に溢れた音楽が披露されました。

ミュンヘンのステージ上で繰り返される、様々な国の代表による音楽は、それぞれが非常に特徴のあるものでした。特に南アフリカ・ケープタウンの男性クワイアによる民謡「ズルーマーマ」には、スタンディングオーベーションが送られました。東・南アジア教区によるアンクルン <インドネシアの竹製体鳴楽器>演奏にも注目が集まっていました。

次に、フランク・ハイケ氏によるディジェリドゥー<オーストラリア北部先住民の竹製の管楽器>を使ったオーストラリア伝統のサウンドで「すべては一つ」が披露されました。これは彼自身の編曲によるものです。この時は観衆も彼の演奏に合わせて手拍子をしました。EYDビッグバンド——2009年ヨーロッパ青年大会で有名になったバンドです——は、有名な教会讃美歌である「喜びの声を上げて歌おう」をディスコ風にアレンジして演奏しました。ヨーロッパを代表して、南ドイツ教区の青年たちで組織するフィルハーモニーオーケストラによる金管五重奏でクラーク作曲「デンマーク王子の行進曲」が演奏されました。

ドイツキリスト教会連合会幹事長のエリーザベット・ディークマン氏から「連合会に加盟しているすべての教会から皆さんよろしく」との挨拶がありました。彼女が「親愛なる兄弟姉妹の皆さん」と呼びかけると、観客席から大きな拍手が起こりました。オーバーバイエルン行政管区長官のクリストフ・ヒーレンブラント氏からは、この国際大会のボランティア運営が極めて模範的であると、高い評価を受けました。

最後に、新使徒教会教理要綱発行に際しては、作成作業に携わったすべての諸君に、改めて謝意を表します。この教理要綱の中で、ペンテコステは「キリスト教会の誕生日」である、と述べております。ペンテコステについて、新使徒教会教理要綱が解説している内容を以下に掲載します：

## 1 神の啓示

神は天と地とを創造された。その神が様々な方法で御自身を現しておられることは、歴史上の事実である。このことから自然界が、神による創世の業であり、人類の歴史が救いの歴史である、ということがわかる。

神は御子イエス・キリストという、類を見ない方法で御自身を啓示された。永遠なる神は、こうした御自身の啓示を常に確実なものとするために、ペンテコステに聖霊を遣わされた。神は、父、御子、

御霊の三位一体からなる神として御自身をお示しなる。キリストが再臨される時に神の御許に引き上げられる者たちは、完全なものとなる。それは彼らが御子をありのままの姿で見ることになるためである(一ヨハ3:2 参照)。

...

#### 1.1.4 教会の時代における神の自己啓示

<sup>ペンテコステ</sup>五旬節の時にエルサレムで聖霊が注がれたことにより、神は御自身が父、御子、御霊という三位一体であることをお示しになった。

...

#### 3.5.2 力としての聖霊——聖霊の賜物

英語で spirit<スピリット>と訳出される、ヘブライ語の רוּחַ<ルアク>やラテン語の spiritus<スピリトゥス>、ギリシア語の πνεύμα<プニユマ>には、「風、息、生氣」などの意味がある。創世記2章7節では、霊を神の命の息と表現している。聖霊は命そのものをもたらす。そこでわかることは、聖霊は神による命の力である、ということである。

救いの歴史を通じて、神の御霊は人類を掴み取り、神の道具となり得るための力となってこられた。この力は人類に影響を与えたり、人類を満たしたり、人類を新しく生まれさせる(テトス3:5 参照)ことができる。

イエス・キリストは御霊の力によって活動され、イエスの中で「主の力が働いた」(ルカ4:14 参照;5:17 参照)。イエスは、復活して天に昇られる直前に、使徒たちに次のような約束をされた「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」(使3:38 参照)。

この聖霊という賜物は、サマリアで起きた出来事に見られるように(使8:14-17 参照)、神が使徒の按手と祈りを通してお与えになるものである。信じる者は聖霊に満たされ、同時に神の愛にも満たされるのである(ロマ5:5 参照)。大切なのは、神の賜物としての聖霊と、神の位格としての聖霊とを区別することである。賜物としての聖霊は、父、御子、聖霊によって与えられるものである。

...

#### 3.5.4 イエスが聖霊を遣わすことを約束される

イエス・キリストは、父の御許に帰られる前、弁護者であり「真理の御霊」である聖霊の来臨を、使徒たちに告げられた。さらに、御自分の民に聖霊を、天の「弁護者」であり高い所からの力として、お与えになることを約束された。イエスは、御自分がこの世を離れることは弁護者として聖霊がおいでになるための前提である、と仰せになった(ヨハ16:7 参照)。事実聖霊は、キリストが死なれ、復活され、父の御許に帰られ栄光を受けられた後で、はじめて賜物として施されるようになった(ヨハ7:39 参照)。

##### 3.5.4.1 弁護者

イエス・キリストは御自分の民の弁護者である(マタ28:20 参照;一ヨハ2:1 参照)。御子イエスは、捕らえられ十字架に磔となる前に、弟子たちに別れの言葉を交わされたが、その中で、もう一人の弁護者を遣わす、と約束された。弁護者とはすなわち英語の Paraclete である。この語は補佐役、仲介者、弁護者を表すギリシア

語の Παράκλητος<パラクレートス>が語源である「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。…しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(ヨハ14:16, 26)。聖霊こそが、教会と共にとどまって下さる「別の」弁護者である。聖霊はイエス・キリストを証しし、栄光をお与えになる(ヨハ16:14 参照)。

この聖霊は、主が昇天されて<sup>ペンテコステ</sup>五旬節の時に聖霊が注がれた後、キリストに従う者たちの中にとどまって、彼らを補佐して下さる(マタ10:19-20 参照)。

##### 3.5.4.2 真理の御霊

またイエス・キリストは、聖霊は「真理の霊」であると仰せになった(ヨハ15:26 参照)。この真理の御霊は、何が神に喜ばれて、何が神の御旨に反するかを明らかにして下さる「その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする」(ヨハ16:8 参照)。聖霊は、真理と欺瞞とははっきりと区別される(使13:9-10)。

主は、この世で活動しておられた時に、すべての真理や救いの歴史を長々と説明されることはなく、将来において聖霊が遣わされることに触れられた「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである」(ヨハ16:12-13 参照)。今日における聖霊の働きも、これと同様である(1.3 参照)。

真理の御霊によって啓示される事柄は、どれもキリストの本質やキリストの働きと密接に関係している。それ故、聖霊は御子の権威を証するのである(一コリ12:3 参照)。聖霊は、

イエス・キリストが肉の姿でおいでになったことを公にし

(一ヨハ4:2 参照)、キリストが父の御子としておいでになり、将来再びおいでになることを告げ知らされる。

##### 3.5.4.3 高い所からの力

復活を果たされた主は、天に昇られる前に、使徒たちに次のような約束をされた「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」(ルカ24:49)。つまり主は、聖霊をお遣わしになることをお告げになったのである。これは神が預言者ヨエルを通して約束された通りである(ヨエル3:1-5 参照)。この約束が五旬節(ペンテコステ)に成就したのである。そしてこの時を機に、使徒たちが公に活動を始めたのである。

「高い所からの力」(ギリシア語で「力」を意味する δυνάμις<デュナミス>)という表現は、御霊が実行力と促進力をもって強力に働きかけて下さることを示唆していると考えることができ、神が力強く執り成して下さることを表している。父と御子は歴史的世界の範囲で御自身を啓示してこられたように、聖霊も救いの歴史における一

つの出来事として、<sup>ペンテコステ</sup>五旬節の時に御自身を掲示されたのである。聖霊は、神に喜ばれる生き方をしようとすることでキリスト再臨の準備をしようとするキリストの教会を、強めて下さるのである。

### 3.5.5 聖霊と教会

新約聖書に収められている諸書簡によれば、初期キリスト教会に聖霊がおられたことが示されている。イエス・キリストが弟子たちに弁護者として聖霊をお遣わしになることを約束しておられたからである。教会は「神の家」「神の住まい」「生ける神の神殿」と表現されている(一テモ 3:15 参照; エフェ 2:22 参照; ニコリ 6:16 参照)。

旧約において、神殿は神の民にとって神の住まいであった(王上 8:13 参照)。これが新約聖書でも応用されて、教会において神が常に臨在されること——それ故聖霊も臨在されることになる——を表すのに、神の住まいと言われるようになったのである。信徒は「生きた石として用いられ、霊的な家に作り上げられるように」する必要がある(一ペト 2:5 参照)。

#### 3.5.5.1 <sup>ペンテコステ</sup>五旬節における聖霊の注ぎ

五旬節の時に聖霊が注がれたことにより、神が父・御子・聖霊の三位一体であることが示された(3.1.1 参照)。父と御子によって遣わされた聖霊が、使徒たちや彼らと一緒にいた人たちを満たした。

これによりキリストの教会が歴史上初めて誕生した。<sup>ペンテコステ</sup>この五旬節の出来事により、聖霊が教会の設立要件であることが明らかになった。つまり、教会と聖霊は一つである、ということである。

聖霊は使徒の導きによって会衆の中で絶えず臨在しておられる。使徒たちの中に神の命がある。神の命は使徒の宣教活動によって啓示される。さらに信徒一人ひとりの言動を通して、神の命が現れるようにすべきである(ロマ 8:14 参照)。

人類は、聖霊の賜物に与ることによって、神の子として三位一体の神と交わりを持つ。この交わりに加わることによって、主の御許に引き上げられようとする者たちは、キリスト再臨の時に完全な者となることができるのである。

#### 3.5.5.2 <sup>サクラメント</sup>聖礼典における聖霊の働き

救いの力が<sup>サクラメント</sup>聖礼典の中に備わっている根拠は、すべての<sup>サクラメント</sup>聖礼典において神のすべての位格による働きがあることである。

それ故、水の洗礼の中にも聖霊の力が作用している。神が——父、御子、聖霊すべてが——水のバプテスマに与った者たちを、神から離れた状態から導き出して下さるのである(8.1 参照)。

聖餐のためにパンとぶどう酒を聖別するのも、そこに聖霊の働きがあるからこそ可能となる。人の語る言葉によって、聖霊の力が神から出る実在の物をもたらすのである。聖餐が聖霊の力によって支えられ、聖餐で食される物が使徒の与える権威に基づいて聖別されるならば、聖餐は十分な有効性を持つ、つまりキリストの体と血が実在することになる(8.2.12 参照)。

聖霊の賜物は、御霊のバプテスマつまり御霊の証印の中で、使徒を通して与えられる。この中で神の力、神の命、神の愛が人類にもたらされる。水と御霊による再生の中で聖霊が働いて、神が人類の

内側に宿られる(ロマ 8:9 参照)。

### 3.5.5.3 使徒職における聖霊の働き

使徒は、聖霊の力によって職務を行う。聖霊は使徒の活動に特別の権威を与える。このことは、聖礼典が適切に執行・実施され、聖書に基づいて福音が宣べ伝られ、キリスト再臨の約束が生き続け、キリスト再臨に向けて花嫁の準備が行われていることからわかる。今日遣わされている使徒を通して、聖霊は初代の使徒たちの時代と全く同じ働きをしているのである。

## 6 イエス・キリストの教会

### 6.2 聖書に基づく設立

イエス・キリストが教会を設立された目的は、一つは、人類に救いをもたらす、三位一体の神と永遠に親しく交わるようにすることである。もう一つは、神を崇め、称えるためである。

#### 6.2.2 発足当初のイエス・キリストの教会

教会そのもの、そして教会の基本はすべて、人としてのイエス・キリストやイエス・キリストの活動が源流にある。人としてのイエス・キリストもイエス・キリストの活動も、救いをもたらすものであり、救いそのものである。「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさる < 私たちが神の子となる > ためでした」(ガラ 4:4 - 5)。神の御子であるイエスは、旧約における神の選民の中でひとりの人としてお生まれになったのである。神が人となった < 神の擬人化 > —— 人の歴史の一部となったのである。

神は御自分に従うように人々に呼びかけ、弟子を集め、御国を宣べ伝えられた。また立法者として——例えば山上の説教を通して——御自身を啓示された。さらに病人を癒し、空腹の者に食べさせ、死者を蘇らせ、聖霊が遣わされることを約束し、実際に聖霊をお遣わしになったのである。神がイエス・キリストという人となられたことは、教会が成立するためにはなくてはならない条件である。この他に教会の基礎となる他のあらゆる出来事には、使徒の任命(ルカ 6:12 - 16)、ペトロの職位設置(マタ 16:18)、聖餐の執行(マタ 26:20 - 29)、イエス・キリストの死と復活、それに大宣教令(マタ 28:19 - 20)がある。これらは神が人となられたことに基づき、神が人となられたことから生じてきたものである。

キリスト教会がはじめて歴史の表舞台に登場するのは、聖霊が注がれたペンテコステの時である。使徒ペトロはこの聖霊の力によって伝道を行った。そして最初の会衆が誕生したのである。洗礼、罪の赦し、聖霊に与ることは、贖いの道において救いをもたらすための要素である(使 2:38)。初期のキリスト教徒は「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」(使 2:42)。こうした状況はキリスト教会にとって決定的に重要なことであった。

www.nac.org より一部抜粋

## 我らは神を信頼する

2008年から2009年にかけての経済危機において、印刷業界は特に厳しい時でした。私が勤めていた会社は自動車、船舶、レジャー産業に大きく左右されていました。私は自分の将来を心配し始めました…。

2009年8月、会社のCEO(最高経営責任者)が私の所にやって来て、早期退職を提案してきました。それは好条件でした。私が会社に所有していた共有資産——私が退職する時のために貯蓄していた巨額の財産——を会社側が買い戻し、しかも65歳になるまで会社が私の健康保険を払い続けてその後は何らかの方法で国民保険で賄える、と言うのです。CEOはこの提案について考えたり妻と話したりするための時間を一週間くれました。

急に妻と私は心配し始めました。それまで失業など考えもしなかったからです。私は、1966年に新使徒教会員になった時、主に仕えることを約束しました。そしてその時以来主は私を失望させるようなことは一度もなさいませんでした。この早期退職の話があった時、私は61歳でしたが、国が定める定年は62歳でした。妻は最後の六年間、常勤の仕事を探していましたが、パートタイムの仕事しかありませんでした。私たちの財産目標には達していなかったのです。私たちはこのことを教会長と教区長老に話しました。すると教会長も教区長老も私たちのために祈ってあげようと言ってくれたのです。

その後まもなく、「The penny(小銭)」という件名のメールが来ました。ある日、会社の社長——裕福な男性でした——が一人の社員夫婦を夕食に招待しました。この社員の奥さんは、どんな話があるのかと気が気でありませんでしたが、経済的に豊かな人の暮らしを知る良い機会だ、と思うことにしました。二人は車で社長の家へ行きました。社長は夫婦をカクテルでもてなし、その後、皆で車でレストランに向かいました。駐車場で着いて、社長は地面に小銭が落ちているのを見つけました。そしてそれを拾って財布に入れました。その様子を見た社員の奥さんは少し戸惑いを感じました。「どうしてこんなお金持ちの社長さんが小銭なんか拾ったのだろう？」食事中も彼女は不安が付きまといました。夕食が終わり、一行が社長の自宅に戻ると、奥さんは自分の思いを抑えきれずに社長にこう尋ねました「道路に落ちていた硬貨を拾っておられましたが、それは価値があるんですか？」

「いいや。」社長は笑って答えました。「その硬貨は『我らは神を信頼する』と書いてあるほうを上にして落ちていたんです。

私は神を畏れ敬う者です。ですから最近自分が抱えている問題について神様に、助けて下さい、とお願いしたんです。そうしたら助けて下さったんですよ。それで感謝のしるしにその硬貨を拾ったんです。」

CEOの提案に対して返答する日の数日前、私は特に意識することなく会社の中を歩き回っていました。すると床に硬貨が落ちていました。その床は最近掃除されたばかりでした。硬貨は表が上になっていました。私はそれを拾って、そして思いを巡らせました。神様は自分と妻に、何年にもわたって様々な方法で良いことをして下さったのです。そこで、私はもう一度、神様を本気で信頼しよう、と決意したのです。水を買おうと自動販売機に行くと、「表」のほうを上にした硬貨がまた一枚落ちていました。表には「我らは神を信頼する」と書かれていました。こんなはっきりしたことはありません！私はすぐ上司のところに行って提案を受け入れる旨を伝えました。上司も喜んでくれました。この提案を私が受け入れなかったら、自分の給料を20パーセントカットしなければならなかったそうです。妻も先住の仕事を見つけることができました。天のお父様は私たち夫婦を素晴らしい方法で祝福して下さいました。それを思い、二人はありがたいという気持ちとうれしい気持ちになりました。



## 大いなる神はすぐ近くにおいて下さる

2月23日にドイツのドルトムントで主使徒の礼拝が行われる前日にコンサートが行われ、そこで子供たちが、自分たちにとって神がどのようなお方なのかを、歌にして表現してくれました:

- 神様は私たちが見ている虹のよう。どんなお方で、いつ、どこにおられるのか、本当のところまったくわからない。
- 神様は水の入った瓶のよう。疲れを癒してくれる。
- 神様は自転車に乗る時にかぶるヘルメットのよう。転んだ時に守ってくれる。
- 神様は救命ボートのよう。おぼれた時にいつでも助けとなる。

言い換えれば、神は必要としている時にいつもその場において下さるということです。神は実に様々な方法で御自身をお示しになります。主使徒は礼拝の中で、次の聖句を引用しました「わたしは確かに知った／主は大いなる方。…主は何事をも御旨のままに行われる」(詩編 135:5-6)。私が長い年月にわたって積極的に奉仕できたのは、神が大いなる方で、万能なお方でありながらその場において下さることを知っていたからであります。そして自らの体験として到達したことは「大いなる神はすぐ近くにおいて下さる」ということです。どこに遣わされようと、どんな環境や伝統や文化や言語の条件下に置かれようと、予期しようとしまいと、孤独であろうとなかろうと、いつも神は前もって自分の近くにおいて下さいました。

神はいつも自分の脇において下さったのです。



ブリンクマン教区使徒。2014年2月23日にドルトムントで行われた礼拝にて。

皆さんが福音伝道をしたり、会衆や教区を設立したりすると、単なる友人ではないそれ以上の関係を作ることになります!私は宗教の権威と国家の権威について説明しなければならぬこともよくありました。敵視されることも少なくありませんでした。拘留されたこともあります。しかし私の経験から申し上げられることは、いつも神がそばにおいて下さったということです。

私たちは神がそばにおいて下さることによっていつも安全

でいられます。

どんな旅でも、危険や不安は潜んでいます。実際に私も体験しました。そんな状況に置かれていても、神といっしょであれば安全です。これも私の経験から申し上げられることです。私にわからないことやまったくどうにもならないようなことが起きても、この聖書の言葉が私を慰め、力を与えてくれました:「主は何事をも御旨のままに行われる。」

神には御計画があります。

私もいろいろなことを計画したり準備したりしてきましたが、うまくいかず、神様のお決めになっていることと違うことに、何度となく気づかされてきました。そして絶えず私は神がお据えになった道を歩むように命じられてきたのです。

神はすぐ近くにおられます。

どんな場所でもたった一人で遣わされたなら、そこでどんな反発を招くやもしれないのですから、だれでも不安になります。たった一人である場所に向かっている時に、何度となく気づかされることがあります。それは「神がそばにおいて下さる」ということなのです!神様は「ここまで来るのに時間がかかりましたね」と私に向かって言おうとしておられるのではないか、と思うことがあります。

いろいろな国で長年にわたって活動してきましたが、それを振り返ると、状況がしばしば大きく変化してきたということを感じざるを得ません。それは教会内においても言えることです。かつては戦争や飢餓や貧困にあえいでいたのが、こんにちでは繁栄と平和を享受しています。かと思えば、順調に成長していくであろうと思われていたのが、突如として状況が悪化し始めました。

こんにち、福音の魂にもたらす効果が薄れつつあり、教会員数が激減しているという状況に直面しています。これは、私たちが未来を深刻に、悲観的に、恐怖感で見なければならぬ、ということなのでしょう。

主は大いなる方であり、御自分がお始めになったことを、完成されるのです。

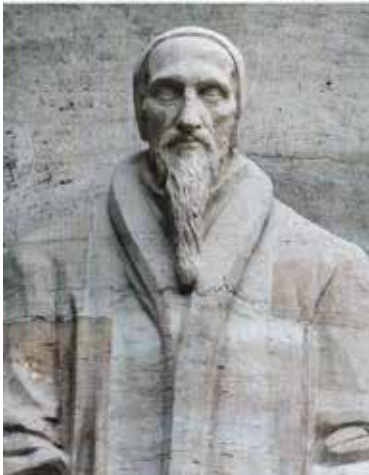
アーミン・ブリンクマン

アーミン・ブリンクマン教区使徒。1948年生まれ。1983年5月22日使徒に就任。2005年6月26日ノルトライン・ヴェストファーレン教区担当の教区使徒に就任。2014年2月23日引退。

## 牧師、長老、その他の職制

16世紀はまだ使徒職再興の時ではありませんでしたが、四つの職制という教義はこんにちと類似した概念でした。この教義はフランス及びスイスで活動した宗教改革指導者であるジャン・カルヴァンによって提唱されました。今年の5月27日は彼の没後450年に当たります。そこで彼の生涯を振り返ります…。

新使徒教会教理要綱によれば、ジャン・カルヴァンはジュネーブで「独自の改革運動」を展開しました(教理要綱11.2.4)。カルヴァンは1509年フランス北部のノワイヨンに生まれ、高度な教育を受け、二度にわたってジュネーブで活動しました。マルティン・ルターを信奉していた彼はバーゼル(スイス)を経由してジュネーブに亡命したのです。彼の主な業績として、まず「キリスト教綱要」を刊行しましたが、これはバーゼル滞在中に執筆しました。1536年、ジュネーブで改革運動を展開しますが、二年後に市当局の取り締まりによって町を追放されました。しかし1541年にはジュネーブに戻って、二度目の改革運動を展開していきました。この時期の著書には、「ジュネーブ教理問答」(1542年及び45年)や「ジュネーブ教会規則書」(1541年)があります。すでにストラスブール(フランス)で聖書研究や講義を請け負っていたカルヴァンは、ジュネーブに神学校(今のジュネーブ大学)を創立しました。そして1564年5月27日に没しました。



ジャン・カルヴァン(1509-1594)はプロテスタント宗教改革者の一人で、ジュネーブの宗教改革記念碑にも記念されている。

### 職制に対する様々な考え方

宗教改革指導者たちの信条は、カルヴァンのジュネーブ教理問答の中で明らかにされました。これはフランス語を話すプロテスタントの教理書として最も重要な書物となった他に、数か国語に翻訳され、さらにこれを手本にハイデルベルク教理問答が作成されました。ジュネーブ教会規則書によって、牧師、教師、長老、執事の四つの職務が導入されました。カルヴァンは、やはり宗教改革者であったマルティン・ブツァー(1491-1551)と共に、ストラスブール滞在中にこの四つの職務を知り、引き継ぎをその内容を体系化しました。宗教改革運動において、改革派教会の中では一つの問題が持ち上がりました。それはカトリック教会の司教や司祭に代わる新たな聖職者が必要となったことです。神を言葉を宣べ伝え、<sup>サクラメント</sup>聖礼典を執行し、会衆を教え

導く必要があるためです。マルティン・ルターは、洗礼によってすべての信徒がいわゆる「祭司」であるとみなしたのに対して、カルヴァンは違う考え方を訴求しました。それが四つの職制という教義であります。

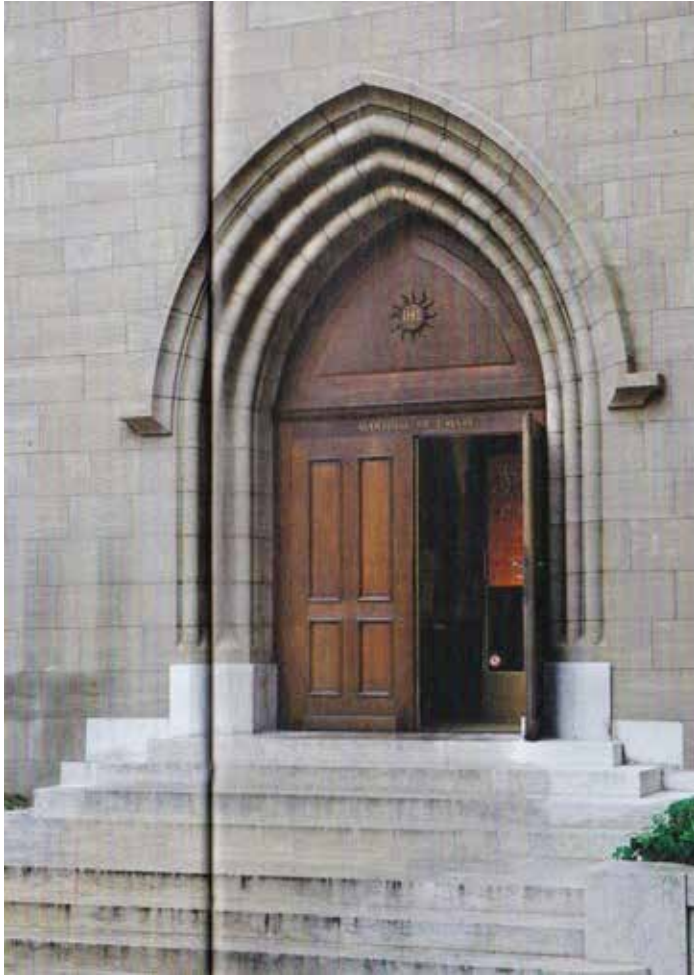
### 四つの職制という教義

カルヴァンが編み出したこの教義は、カトリック使徒教会で一般的だった——エフェソの信徒への手紙4章11節を基本としさらに使徒職を組み込んだ——四職の教えと少し異なっていました。カルヴァンの教義もエフェソの信徒への手紙4章11節を基本としていましたが、その他にローマの信徒への手紙12章8節やコリントの信徒への手紙12章28節を始め、他の聖句も参照されていました。カルヴァンは司教や司祭——ジュネーブの市民はこの二つの聖職についていた者を町から追放していました——が担っていた職務を四つの聖職に振り分けました。そしてこの四つの職制に階級を設けませんでした。カルヴァンはこのような簡潔であかりやすい言葉を使って解説しております「主は、御自分の教会に対して職務を遂行されるために、四種類の職務を制定された。一つ目は牧師、二つ目は教師、三つ目は長老、そして四つ目は執事である。秩序ある教会を設立・維持しようとするならば、この職制を守っていかねばならない」(ジュネーブ教会規則書[1541年])。では、それぞれの職務について検証していきましょう。

### 牧師、教師、長老、執事

牧師職は宣教職とも呼ばれ、神の御言葉の宣教、<sup>サクラメント</sup>聖礼典の執行、さらに牧会の職務を担いました。教師職は聖書解釈を行い、牧師たちに聖書の内容に十分適った宣教活動を保証しました。さらに、宗教的分野に限らず学校における一般的教育活動にも従事しました。「本来、福音の宣教とは、無学や虚偽の考えによって教義の純粋性が損なわれないように、純粋な教義を信徒に教えることである」(ジュネーブ教会規則[1541年])。教師職は他にも、大学の付属学校を設立したり、聖書に関する講義を行いました。長老職は教会会議(別名長老会)の構成員であり、教会に指令を出したり、会衆の聖別を確実に行ったりする役割を担いました。「長老職は、責任をもって一人ひとりの生活様式に注意を払わねばならない」(ジュネーブ教会規則[1541年])。執事職は二つの職務に分かれていました。片方の職務は

会衆の資産や奉納の管理で、もう片方の職務は病人や困窮者の看護であります。「初代教会では、二種類の執事が置かれていた。すなわちある執事には、貧しい人たちのために物品を集めたり、仕分けたり、管理したりする——不動産、貸家、下宿などを日常的に提供する——任務が与えられ、またある執事には、病人や困窮者を直接看護する任務が与えられた。現在までこの二つの任務分割を維持してきたのは、私たちは管理者であり看護者であるからだ」(ジュネーブ教会規則 [1541年])。



### 地域社会長老という職制

またカルヴァンは、長老職は会衆が選ぶべきとする概念を導入しました。この考え方は当時において新しく革命的でした。長老は——他の職務と同様に——司祭ではなく平信徒が担ったためです。(一般的にこうした職務に就く者はジュネーブ市議会の議員でした。)長老の最優先の任務は教会規則を守らせることでもあります。このような任務はカトリック教会の聖職者、つまり宗教改革前の司教や司祭が担っていました。長老職はこうした特徴を持つようになったため、改革派教会はこの職務にちなんで長老派教会として知られるようになりました。このようにジュネーブにおける宗教改革運動は、長老派という名称のもとでスイス、オランダ、スコットランド、さらに北米へと世界中に広がって行ったのです。



写真上： ジュネーブにあるコレージュ・カルヴァン。世界最古の公立中高一貫校の一つ。カルヴァンが1559年に学校を設立した際に開校した。

写真左： カルヴァン講堂。隣にはサン・ピエール大聖堂がある。彼はここで講義を行い、自身の革新的神学論を公にした。

### 7月 礼拝案内

3(木)	19:00	週中礼拝	
6(日)	10:30	故人の為の特別礼拝	聖歌隊練習無し。
10(木)	19:00	週中礼拝	
13(日)	10:30	日曜礼拝	【教会清掃日】清掃後に聖歌隊練習。
17(木)	19:30	週中礼拝	
20(日)	10:30	日曜礼拝	礼拝後に聖歌隊練習。
24(木)	19:30	週中礼拝	
27(日)	10:30	日曜礼拝	お茶会(説教内容についてのQ&Aや信仰における疑問など)。 お茶会終了後に聖歌隊練習。
31(木)	19:00	週中礼拝	

※7月17日(木)、24日(日)の礼拝開始時刻にご注意下さい。



# ペンテコステ（聖霊降臨記念祭）とミュンヘン滞在記

昨年の5月19日、ドイツのハンブルグ市で挙行された当教会の、創立150周年記念を兼ねたペンテコステ礼拝に参加させて頂きました。今年の、ペンテコステ記念礼拝と、国際大会は、ドイツ・ミュンヘンのオリンピック記念公園の競技場で開催され、日本からもアーデ牧者、トーマス牧師、山本執事、矢幡夫妻が参加いたしました。前日の競技場はスポーツの雰囲気でしたが、8日の礼拝の時は、祭壇を中心に、全体が厳粛な、聖なる場所となり、主の御臨在を実感いたしました。

6日（金）、開会式にて開会宣言があり、来賓として、オーバーバイエルン行政区長官とドイツキリスト教会連合会理事長からの挨拶がありました。

7日（土）はコンサートや、主使徒との対話がありました。

この両日は、スタジアムがサッカー場であるかのように、歓声とウエーブ、歓喜のときでした。

8日（日）のペンテコステ記念礼拝では、全世界に宣教を展開している各教区から合計5万名が参加しました。200名の聖歌隊員の賛美の後、主使徒がドイツ語で開会の祈りを捧げてから、メッセージを語られ、即時、英語、その他の言語に通訳され、この映像とメッセージが衛星中継されました（東京都多摩市でも映像とメッセージが鮮明に受信できました）。この礼拝はかくも多数の信徒を恵み、感動させたことごとでしょう。昨日ま

での賑やかさとは打って変わって、厳粛な雰囲気、聖餐に与れたことは、驚くべき神の恵みによるものでした。

閉会コンサートをもって終了しました。

期間を通して、当教会が掲げる目標“一つの信仰、一つの目標”また、“愛による奉仕”が、実を結びつつあり、大勢の主にある兄弟姉妹たちが、心を一にして、会場の準備に、接待や案内役に従事されたことは、まさに“愛の奉仕”の実践でありました。

また、東・南アジア教区の出演として、インドネシアから青年たち数十名がアングラ（竹製の楽器）で嬉々として演奏されたことで、観客は引きも切らず立ち寄り、傾聴しておりました。日本からは折り紙の実演があり、多くの青年たちが実演者に倣って楽しみ、日本から持ち込んだ手製の、貝を飾りにした紐ネクタイ約50本も、喜んで受け取っていただきました。この様にして、各種の国際的交わりが進行しました。その間、多摩の教会で継続的に数年間、あるいは時折出席された、諸国の兄弟姉妹たちとも再会できたこと本当に幸いでした。

6月8日の朝、多数の神の子たちが、礼拝場に集合することは、困難である事がわかりました。駐車場には限度があり、大多数の方はバスや地下鉄で行くことになりました。私どもは地下鉄を利用しましたが、どの電車も超満員でし。車内でコーラスが始まり、そのハーモニーの素晴らしさに感動いたしました。他の車内でも同じ状況であったと伺いました。後刻分かったことですが、市の当局がこの特別集會を考慮して、特に電車を増発して下さったとのこと。日本では見られない光景で、そこには大きな“我らの家族”がありました！全ての点で、喜びと感謝を持って帰国出来ましたことを御報告いたします。



# 新使徒教会 教理要綱(抜粋)(3)

## 3 三位一体の神

父、御子、聖霊によって唯一の神が形成される。永遠の太古から神が三位一体であることは、神が救いの歴史において御自身を啓示してきたことから証明される。最初から、父、御子、聖霊が存在し、創造し、御業を成し、御業を維持してこられたことは、救いの歴史が示してきた。

旧約時代は、おもに父なる神が御自身を啓示した。御子や聖霊の働きは、まだほとんど人類に認知されていなかった。ただ新約聖書の記述によれば、イスラエルの人々が砂漠を旅している時には既に御子がいたことを使徒パウロが述べており(一コリ 10:4)、聖霊も旧約時代に言葉を発していたことが、マルコによる福音書 12 章 36 節やヘブライ人への手紙 3 章 7 節にはっきりと書かれている。

神の御子が人となられ、死なれ、復活されたことや、聖霊が遣わされたことによって、神の三位一体性が理解できる。イエス・キリストは、ヨハネによる福音書 16 章 13 - 15 節の中で、御自身に属するものがすべて父に属し、聖霊の告げることがすべて父や御自分から出たことである、と仰せになり、神の働きが三位一体であることを強調しておられる。

三位一体の神は、父、御子、御霊の交わりにおける唯一の神である。神はこの交わりに人類を加わらせようとして下さる。

### 3.1 神の本質

神について、その本質や働きを人間の英知で理解することはできない。万能且つ偉大なる神に近づくことは、信仰を通してはじめてできることである。イエス・キリストは人類に、愛と憐れみと恵みに溢れた父なる神を啓示し、そうした愛や憐れみや恵みに人類が与えられることを可能とした。さらに、神からの啓示が聖霊によって与えられている。聖霊は信仰に忠実な者たちを神の深みへ究めさせて下さる(一コリ 2:6-16)。

神の本質にはいくつかの特徴がある。それは、唯一の神、聖なる神、全能なる神、永遠なる神、愛に溢れる神、恵み深い神、義なる神、完全なる神であるということである。神は無名の存在でもないし、存在が隠されているわけでもない。神は御自身のほうから人に歩み寄り、人に語りかけ、人が神に語りかけられることを可能とする。

神の特徴を表現するならば、完全性や絶対性ということになるが、人類が扱える言葉を尽くしても、神に関する事実を忠実に表現することはできない。

### 3.2 神——父、御子、聖霊

神は御自身が父、御子、聖霊であることを啓示されてきた。これにより、神が三位一体であることを悟ることができる。こうした神の自己啓示が、三位一体の教えの基本を成している。歴史と創造の業における神の働きは、父、御子、聖霊によるそれぞれの御業として行われる。神は創造主、贖い主、和解者、新しい創造の実行者として御自身を啓示しておられる。そして、イエスの生涯——受洗から、変貌、十字架の刑、復活、昇天まで——と、ペンテコステにおける聖霊の注ぎによって、三位一体性、すなわち神が父、御子、聖霊であることを示しておられる。

神の三位一体性の奥義は、旧新約聖書を通して様々な形で描かれている。しかし三位一体という表現が使われたり、三位一体に関する教えが示されたりしている箇所は無い。初代教会では、三位一体の教義が認められており、教えとして位置づけられていた。

### 3.3 父なる神

神は、御子なる神が人となられたこと<神の擬人化>によって、最高の方法で父なるお方を啓示される「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。[...] いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」(ヨハ 1:14, 18)。父なる神は永遠の太古からただお一人の御子をお生みになった(3.4.1 参照)。この奥義は御子がお示しになる者たちにしかわからない「父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいない」(マタ 11:27)。

「父」という表現を、神との関わりの中で用いる場合、神による創造の業、神の権威、愛に溢れた神の配慮という側面とつながりが出てくる。神は御自身がお創りになったすべてのものの根源であり、その被造物のすべてを維持される。このように考えると、全人類が神に近づくことができる。人類をお造りになったのは、父なる神であるからである。

旧約時代、神はイスラエルの民に、御自身が愛に溢れ<sup>あふ</sup>配慮に満ちたお方であることを啓示された。神はモーセにこう仰せになった「あなたはファラオに言うがよい。主はこう言われた。『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。わたしの子を去らせてわたしに仕えさせよと命じた』」(出4:22-23)。イスラエルの民は神を「父」と呼んでいた(申32:6;エレ31:9)。イエスも、ユダヤの人々に向かって山上の説教をされた時、神を彼らの父と呼んでおられた(マタ5:16)。イエスは彼らに対して、神をお呼びになる時は「天におられるわたしたちの父よ」(マタ6:9)と言いなさいと命じられた。

イエス・キリストは、水と御霊による再生を通して、いと高きお方の子——すなわち後継者——になる道筋を示された(エフェ1:5;テト3:5-7;ロマ8:14-17)。これにより「父」と「子」の概念に新しい要素が加わった。ヨハネの手紙一3章1節では、再生を果たした者たちが神の子となる保証を得られるのは、父としての神の愛を受けているからである、と述べている「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです」。

### 3.4 御子なる神

イエス・キリストが神の御子であることを告白することは、キリスト教信仰の基本の一つである。これについては、新使徒信条第二条でも「私は、神の唯一の御子、私たちの主イエス・キリストを信じます」と端的に告白している。この信条文の内容をさらに深めているのが、ニカイア・コンスタンティノポリス信条(2.2.2 参照)の、次の一節である「私たちは、…万世の前に(アイオーン)父から唯一生まれた御子、唯一の主、イエス・キリストを信じます。主は光よりの光、神よりの神、生まれ、造られず、御父と一体であります」。

私たちが「御子なる神」という場合は、三位一体の神における第二位格、すなわち父なる神及び聖霊なる神との交わりのうちに、永遠から永遠までを生き続け、支配されるお方を指す。信条文にある「生まれた」という表現は生物学な言葉ではなく、父なる神、御子なる神、聖霊なる神における関係の奥義を言葉として表現しようとしたものである。

父なる神と御子なる神との間に、地位的格差はまったくない——尤も「父」「御子」という表現は、ニカイア・コンスタンティノポリス信条でいうところの、いわゆる「生まれた」序列を表している可能性はある。父と御子は等しく真の神であり、本質的に同じである。このことについて、ヘブライ人への手紙1章3節では「御子は、…神の本質の完全な現れ」と述べている。

御子なる神は、イエス・キリストという姿で、人となられたが、神のままでもあった。神は歴史の一部となり、歴史において足跡を残された。御子なる神を信じるということは、必然的に歴史上の人物として活躍したイエス・キリストを信じることになる。新使徒信条第二条では、神の御子が人となられてからの生涯におけるいくつかの重要な出来事を明らかにし、それらの出来事が救いの歴史を築く上での基礎にもなっていることを説明している「私は、そのひとり子、私たちの主イエス・キリストを、信じます。主は聖霊によってやどり、おとめマリアから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、陰府に下り、三日目に死人のうちから蘇り、天に昇られた。そして全能の父である神の右に座し、そこから再びおいでになります」。

イエス・キリストは真の人であり真の神でもある。人としての性質と神としての性質の、二つの性質を持ち合わせておられる。この二つの性質が純粹に、変わることなく、切り離したり分けたりすることのできない状態で、お一人として存在しておられる。

御子は人としての性質において、他の人と同じである。他の人と違うのは、罪のない状態でこの世においでになり、一度も罪を犯さず、十字架上で死なれるまで父なる神に従順であられたことである(フィリ2:8)。

一方、神としての性質においては、地上で卑しい状態になられても、神であることに変わりはなく、万能であり完全であり続けた。御子は様々な方法で、御自身の位格の奥義をお示しになった。例えばマタイによる福音書11章27節で、御子は次のように述べておられる「すべてのことは、父からわたしに任せられている。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいない」。イエス・キリストが神の御子であるということを悟るのは、神からの啓示によってである「わたしたちは知っています。神の子が来て、真実な方を知る力を与えてくださいました。わたしたちは真実な方の内に、その御子イエス・キリストの内にいるのです。この方こそ、真実の神、永遠の命です」(一ヨハ5:20)。

### 3.5 聖霊なる神

聖書では、聖霊つまり神の御霊について多く証している。神の御霊によってはじめて神を理解することが可能である、と聖書は証している「人の内にある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません」(一コリ2:11)。使徒パウロは、イエスが主であるという認識に至るためには聖霊との関連性が不可分であるとしている「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです」(一コリ12:3)。

新使徒信条第三条では「私は、聖霊[…]を信じます」と証している。これは「使徒信条」の表現と一致している(2.2.1 参照)。二

カイア・コンスタンティノポリス信条では、この内容をさらに包括的に論じている「また、[私たちは]主なる聖霊を信じます。聖霊は命の与え主、父と子から出られ、父と子とともに崇められ、称えられ、預言者によって語られた主です」。

聖霊は真の神である。聖霊は父と御子から発せられ、父と御子と交わりつつ永遠に生きておられる。天地創造や救いの歴史においても、父と御子と共に関わっておられる(3.3.1 参照)。そして聖霊は神の位格の一つであり(3.1.1 参照)、父と御子と共に、主と崇められ、称えられるのである。

聖書の中で聖霊は「神の霊」とも称されている(創1:2; ロマ15:19)。他にも「主の霊」(サム上16:13; コリ3:17)、「真理の霊」(ヨハ16:13)、「[イエス・]キリストの霊」(ロマ8:9; フィリ1:19)、「御子の霊」(ガラ4:6)、「栄光の霊」(一ペト4:14)と表現されている。

また新約聖書では、聖霊が「弁護者<口語訳=助け主>」(ヨハ14:16)であると述べている。さらに「力」「<神の>賜物」とも述べている(使1:8; 2:38)。この神の力は、父と御子によって約束され、遣わされたものである。力であり賜物である聖霊は、御霊の証印が行われる時に与えられる。御霊の証印と水のバプテスマによって、水と御霊による再生をし、神の子となる。



写真左上：聖餐式の為、並列した牧師達と会衆  
写真右上：7日に行われたコンサート会場にて  
写真左：新使徒教会国際大会が三日間にわたって開催されたミュンヘンのオリンピック記念公園

<<編集後記>> “お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。「年を重ねることに喜びがない」と言う年齢にならないうちに” (コヘレト 12 章 1 節)。7月号はイエス様に関心のある方や、初信者にも解り易い信仰の案内書です。読後感や質問がございましたら、遠慮なくお寄せ下さい。出来るだけ応答させていただきます。皆様の御健康と平安をお祈り申し上げます。